

古島敏雄氏の

「中國農村慣行調査第一卷  
を讀みて」に答えて

内田智雄

最近に刊行せられた「中國農村慣行調査」の第四卷に、古島氏の第一卷に對する書評が載せられていて、「歴史學研究」第一六六號よりの轉載)、私は始めて氏の書評を讀むことができた。しかしこの書評は、その表題の示すが如く、第一卷が刊行せられて、第二卷以後がまだ刊行されていない當時に評されたものである。しかしこのことは、第二卷以後の内容や、またその調査方法が、第一卷といちじるしくちがつていることをいわんとするものではない。従つて氏の書評は、既刊未刊を問はず、とにかく「中國農村慣行調査」全卷に通じ得るものといふことができるとおもふ。

そしてこの書評は、仁井田氏がその「序」に述べている如く、まことに「好意ある同情」的なものではあるが、この「慣行調査」のもつ基本的ないろいろな問題を、最も適確に指摘し剔抉

古島敏雄氏の「中國農村慣行調査第一卷を讀みて」に答えて

せられたもので、われわれに關係のない一般的な書評としても、最近これほど敬服して讀んだものはないように思われるし、この調査にたずさわつたもののひとりとしては、言言句句、悉く私自身に向けられた批評であるかの如き感をさえいだかざるを得なかつたと、こゝに正直に告白しておきたいと思う。そしてこの書評は、前記の如く、第一卷の刊行當時になされたものであるので、われわれ關係者の側から、すでになんらか回答がなされているかも知れないけれども、私はまさしく寡聞にしてそれを知らないで、とにかく私は私として、氏の好意にみちた適確な批評に對して、なんらかの回答をすることが、調査にたずさわつたもののひとりとして、當然な義務であると感ぜざるを得ないわけである。しかし以下私の記するところが、果して氏への回答たり得るや否や、あるいはまた單なる辯解に終始するや否や、これもまた賢明にして好意ある氏の諒察にまつよりほかにはない。

まず古島氏のこの「慣行調査」に對する第一の、また最も基本的な要望は、調査者自身による總括的な本報告書の作制とその公刊ということであつて、それを氏は次のようなことばをもつて表現されている。

現に學界の第一線に活躍する曾つてこの研究班に屬した多くの學者たちの手によつて討議を盡した本報告書の出版せられることを望んでやまない。それは資料集たるこの出版を完成

させることよりも一層大きな、研究者としての義務でもあるのではないかと思われる。

と。そしてまた「慣行調査」の如き資料集と一般讀者との關係についても言及し、

資料集を讀み、それを利用し、評價しうるのは、特定の問題を自ら持つ人、或はそれに依據した業績の資料利用のやり方を問題にする人であり、その時はじめて資料集を讀むことが興味深い仕事となるのが普通だからである。

このような困惑を感じた私の、この書に對しての最初の感想は、第一に、先にも述べた、問題設定者の立場からの總括的な本報告を完成した上で、私のような程度の讀者に對してこの調査から得られる、革命前の中國農村の姿を示して欲しいという希望となるのである。

と述べられている。そして氏はこの書評の末尾に、三たびその要望を次のように記されている。

重ねてこの計畫の完成と、私共一般讀者に對してこの調査の價値を最も容易に與えうる本報告書の完成を希望して紹介にかえたいと思う。

と。そして氏によつてかくもくり返して強く要望されているところのものは、要するに資料集としての「慣行調査」は、各調査者によつて設定せられた問題が、農民に向けられた質問の形で摸索せられたその経緯を物語るものであるが故に、そのよう

な資料集のみでは、すくなくとも一般讀者には、その問題が那邊にあり、その問題を如何にして追究し、またそれを如何に解決し、あるいはまた何が故に解決し得なかつたかを示す「本報告書」が、この「慣行調査」とともに刊行されるにあらざれば、この「慣行調査」が、多數調査者の危険をおかし、また多年にわたる苦心の結晶ともいふべ資料の大集成でありながら、特定の人以外には、その資料的價値を認めることが困難である。従つてこの書の資料的價値を明らかにするがためには、どうしても調査者の十分な討議による報告書の決定版が書かるべきである、というにあると思われる。そしてここに氏の指摘せられるところは、まさにこの書の批評の決定版ともいふべきもので、調査を擔當したもののひとりとしての私は、たゞたゞ肯するよりほかにはないが、仁井田氏はこの點に關し、その「序」において次のように述べている。

なお同氏指摘の通り、本書は共同研究者たちの最終報告書としてまとめた統一の見解ではなく、一つの素材である。その點（まとめ方にもよるが）、なまじまとめられたものよりは遙かに利用度の高い點があると思う。といつて最終報告の發表を怠つてよいというわけではない。

と。そしてこゝで仁井田氏のいう「最終報告」とは、古島氏の要望せられる「本報告」をいうものであると考えられるが、とにかく古島氏が、この調査の「本報告」が公刊されないかぎり

「中國農村慣行調査」のもつ資料的價値は、すくなくとも一般人には認めがたいとされているのに對して、仁井田氏は「なまじまとめられたものよりは遙かに利用度が高い點がある」とされていて、兩者基本的にくいちがつた立場にあるわけである。事實私自身も、仁井田氏と同じように考えていたのであるが、古島氏のいわれるところが、「一般讀者」としての實感であるとすれば、仁井田氏のいわれるところのものは、古島氏へ回答とはなし得ないわけである。そしてこのように問題の焦點をたがえた仁井田氏の辯明は、この仕事に對する仁井田氏の關係や役割、さらに仁井田氏における「慣行調査」の資料的意義、すなわち仁井田氏といわゆる「一般讀者」との差異を前提としてのみ理解し得ると思われる。

それはともかくとして、古島氏の要望切なる「本報告書」の作制は、いまのところ率直にいつて、殆んど望みがないといわなければならぬと思う。そしてさきに仁井田氏が古島氏に對して、およそ回答とならない回答を述べていられるのは、このよくな實態に即しての、やむことを得ない回答であり、またこの資料公刊に對する仁井田氏の立場とともに、現地の調査擔當者に對する深いおもしろい存していると思われる。しかしとにかく、仁井田氏およびわれわれのような條件にあるものと、古島氏のような「一般讀者」としての立場にある人々との間に、この書の資料的價値や意義に對して異なる見解が生ずるのは當然

古島敏雄氏の「中國農村慣行調査第一卷を讀みて」に答えて

なことであるが、とにかく公刊せられたこのような資料は、それが貴重なものであればあるほど、ますます「一般讀者」にも資料的價値をもち、かつその「利用度の高」いものであつてほしいことはいうまでもない。そのためには古島氏は、「本報告書」が是非とも必要であるといわれているのである。

しかし現實には、古島氏のいわれる「本報告書」や、仁井田氏のいう「最終報告の發表」は、殆んど不可能に近いといわなければならぬと思う。私をしてさらに率直にいわしむれば、現在の單なる資料集にすぎない「中國農村慣行調査」でさえも、仁井田氏や幼方氏を始として、旗田、安藤、小沼氏その他、まつたく東京在住の舊滿鐵側の調査者たちの、異常な熱意と努力とによつて刊行されつつあるのであつて、現在の段階と條件とのもとでは、これ以上の要請は、なんとしても實現が困難であるといわなければならぬと思う。まず第一に敗戦というきびしい現實は、内地に歸りつゝいた調査者たちを四散せしめて、純粹に學問を職として生活し得るものがきわめて少數で、また殆んどどの調査者が、リュックサックひとつという引揚げ者であり、調査資料を持來し得たものは殆んどないといつた現狀であつて、その他研究生活上のいろいろな惡條件は、内地にあつて戰災その他の不幸を経験された方々以上であり、従つて今の段階と條件のもとでは、われわれ自身も明らかにそれを認め、氏もまたそれを強く要請されているにかゝらず、やはり早急には困難

であるといわなければならぬであらう。そしてこのような困難な事情を前提として、われわれ関係者の側からこれをいえば、さきに仁井田氏がいわれているようなことも、やはり一應はいふ得るのではないかと思う。しかしながら古島氏のいわれる「討議を盡した本報告」ではなくとも、「中國農村慣行調査」全六卷の刊行を見れば、調査者たちはそれぞれに、最小限度の調査資料だけはもち得ることとなり、それによつて各自の擔當した調査につき、その報告書をまとめるといつた程度のこととは、全然望みがないわけではなく、そしてそれは、われわれの共通した、また當然な義務であると考えている。私が近く公刊する「中國農村の分家制度」(岩波書店)の如きも、私の擔當した家族制度の調査に對する報告書の一部であるが、とにかく調査者が各自、もし可能ならば、その擔當調査項目全般にわたつて、もしくはその基本的な問題について、なんらかまとまつた報告をなし得るとすれば、それによつても「中國農村慣行調査」の一般讀者は、資料の批判や比重や、またそのとりあつかい方などについて、學び得るところすくなしとはしないであらうと思う。そしてこれは古島氏の要望を、十全にみたし得るものではないとしても、多少ともそれに答えるものといふことができるであらう。たゞそれが「討議を盡した」ものでも、またいわゆる「最終報告」でもないため、調査者相互の間に、必ずしも統一的な見解をもち得ないことはもちろん、相互にいくちがつた形の

報告さえなされるおそれがあるけれども、それはそれとしてやはりひとつの意義はあるであらうし、またそれによつて、調査者も共同研究者も、さらにそれに興味や關心をもたれる一般の讀者や研究者も、古島氏のいわれる「討議を盡」すひとつの資料と方法とを見出すこととなり、そしてこの程度のこととは現實に、必ずしも不可能ではないと考えられる。もちろん事前に、調査者たちが責任ある討議を盡して、然る後にその「最終報告」を發表するということは、もちろん望ましいことではあるが、現實にはやはり困難であるといわねばならない。要するに、上に私が述べたようなまとめ方が、多少とも實現性をもち得るものであると考えられる。

以上古島氏の提起されたところのものは、「中國農村慣行調査」の最も基本的な問題であると考えられたので、これにやゝ多くの紙數をついやしたのであるが、以下同氏の提示せられた疑義な意見について、私は私なりに、簡略に一應の説明や見解を申し述べておきたいと思う。

次に氏は、調査項目に見られる東京側と滿鐵側との差異について言及されているが、この兩者の關係や経緯については、こゝでは改めて説明することを省くこととする。しかし、調査項目に準據する「更に細分された質問表」の準備、および「その結果を整理するための集計・整理の方針」に關する問題は、調査の方法論に關する重要な問題であるので、この點につき若干の

説明と辯解とをすれば、やはり氏のいわれる如くわれわれも、三班三地域に分かれての最初の調査においては、調査項目に準據し、さらにそれを細分化し、具體性をもたせた質問表を用意して、それを中心とする調査を行つたこと、「中國農村慣行調査」の各巻に見られる如くであるが、その結果は、上記各巻に明らかな如く、やゝともすれば調査が機械的形式の表面的に流れて、重點的な調査や、問題の所在を剔抉し得ないうらみがあつたので、その點をわれわれは自己反省して、第二回以後の調査においては、この方針をかなり基本的に改めることとした。もつとも第一回の調査は、三地域におけるそれぞれの調査項目の概況を知ることが目的としたものであり、その調査の直接擔當者外のものが、調査質問表によるきゝとり調査を代行したために、その弊を一層深くしたきらいがあるが、とにかくこれは質問表の整備の不十分と、その運営の未熟拙劣さによるものであつて、これを古島氏が指摘されている表現の意を體していえば、豫想した問題のあり方が必ずしも左様ではなかつたり、あるいは基本的にそれがくつがえされたりした場合における調査者の「對應の」仕方に、變化や彈力に缺けていたことが、第一回の調査を、必ずしも成功に導き得なかつた主因であると考えられる。そしてこのことに對する反省は、われわれの共同討議の對象として、きびしくかつ具體的に批判しあつたのであるが、しかし次回の調査の時期や、農閑期や治安の良否に制約されてい

古島敏雄氏の「中國農村慣行調査第一巻を讀みて」に答えて

る關係上、十二分にかつ徹底的に、討議し反省しあつてゐる時間的な餘裕がなく、他方、東京側に調査資料提供の時間的な制約があり、このため、すくなくとも私に關しては、第二回以後における調査の方法や對象はかなり異つたものとなり、他の調査者とは明らかに歩調のあわない跛行的な調査を、ついに最後まで續行したのであるが、それは私が、なまじかな中國に對する既存の知識を止揚して、現實に即し、調査の中に、それを生かすという轉身をなし得なかつたことと、さらに、私が擔當した家族制度の調査において、家族生活を制度たらしめてゐる何か骨核的なもの——そしてそれは一應歴史的なものと想定し得ると思われるが——の存在への摸索と追求とは、私をしてついに輩、すなわち世代の問題につきあたらしめたのであつて、そのため私の調査は、私のいう世代主義の調査に終始してゐるとも極言し得るわけであるが、これもまた古島氏の言をもつてすれば、「例えば同族における輩・街坊の輩の追求は、何か手薄さを感じさせる」ていのもので、事實また私も、それをそのまま卒直に肯定しなければならぬけれども、その「手薄さ」の指摘は、第二巻以後、および私がこれまで輩について記したものとを参照していただくことによつて、多少とも補い得るのではないかと考へてゐる。もつとも私の輩についての小稿は、もとも氏のいわれる「本報告書」ではないが、かゝるわれわれの報告書とともに、あるいはそれをまつて、この資料集たる

「慣行調査」の意義や價値が明らかにされるとされるならば、氏のこの點に關する批評のいく分かは、氏におかえししてもよいのではないかと思われる。

とにかく私のこのような問題の偏向と、およびそのききとりを、一般的抽象的なものよりも、現實の具體的なものにしぼろうとする私の意圖とは——それはもちろん第一回の調査經驗にもとづくものではあるが——いきおい調査の範圍を局限し、調査を自己の興味や問題に集中させる結果となり、慣行調査という共通な軌道や基盤を、私に關しては、やゝ逸脱させることとなつてしまつたが、調査の進行とともに、他の調査者に關しても、かゝる傾向が全然ないとのみはいふきれない面があつたと思われる。そしてその間にあつて杉ノ原舜一氏は、調査全體の歩調の推進と、十數名の調査者相互の調整に、隨分の苦勞をされたものであるが、調査の跛行的な進行と、調査地域の擴大や治安の悪化、戰爭の深刻化にともなう滿鐵調査部々内の政治的交渉の必要の要請などその他のために、卒直にいつて、杉ノ原氏の努力にもかゝらず、十分には酬い得なかつたといわなければならぬと思う。さらにまたこれは、必ずしもその主たる事由ではないが、この調査が、東京側とは一應三年間の協定ではあつても、われわれの調査計畫としては十年であり、腰のすわつた、成果をいそがない、本格的な調査をしようとのわれわれの抱負は——また現實は決してそんなに容易にまとめ得るもので

はないが——結果としては、われわれのとりまとめに對する意識を、かなり緩漫にさせたことも見逃せない、とにかくこのような諸事情のため、古島氏のいわれる調査の「結果を整理するための集計・整理の方針が定められ」ても、十分にはこれを果たし得ないまゝで、主として戰爭の窮迫化にともなう犠牲として、慣行調査はついに廢止される悲運に遭遇したわけである。従つて古島氏が、この集計や整理の點に關して、「本書の範圍内ではそれらの點は十分明らかにし得ない」といわれるのは、まことに宜なりといわざるを得ないと思う。そして上記のことと關聯して、そしてそれは主として私に關し、また他の調査者に對しても多少ともいふ得ることは、調査が後の方になるとともに、全體として具體的重點的になつていゝるが、それは調査の經驗による問題の集約化であるといふことができるであらう。しかし「中國農村慣行調査」は、調査地域を單位として輯録せられてゐるため、こゝした事情や経緯を見逃さしめるおそれがあるので、特にその調査の年月日をそれぞれに付したわけで、讀まれる人はこゝした調査の時間的なたての關係も、あわせて考慮にいれていたゞきたいと思う。そしてこのような問題中心の具體的重點的な調査は、すくなくとも私の調査についていえば、未刊の昌黎縣侯家營と良郷縣吳店村のものについて特に著しいが、それは、慣行調査事業の内部的な關係とともに、この兩村落の調査には東京側の人々、戒能磯田徳田氏その他の人々

が、ともに参加されたことによる調査期間の関係なども、確にその一因であつたと考えられる。

そのほかに古島氏は、同一應答の重複のわずらわしさを指摘されるとともに、また通譯を介しての調査の困難性に對する同情も述べておられ、これらの問題についても、私は私としての意見も感想もないではないが、これは他日の機會に譲ることとして、最後に氏が、問題をもたない一般讀者として、資料集としてのこの書を読み、多少氣になる點としてあげていられる四條につき、簡略な私の所懐を記しておきたいと思う。

第一は、村の支配勢力が那邊にあるかに關し、氏が讀まれた「太陽は桑乾河をてらす」と「李家莊の變遷」とのふたつの小説から、從來「村の表面に立つ人々は假のものであり、それは交替しつつ背後に強い支配階層が變貌しつつ温存されているという印象を受け」といられたのであるが、われわれの資料に徴するかぎり、「行政組織の末端としての村の組織は變つても村の支配的勢力の構成は根本的には變らなかつたように思われる」とされている點である。この點については、村落を直接調査對象とされた人によつて答えられるべきであるが、私の全體としての調査經驗からは、「村の支配的勢力の構成は根本的には變らなかつた」といつてよいように思われる。もつともわれわれは、調査そのことの性質上、治安のよい村落を特に選んでおり、また公租公課も仕はらい得ないような村落を特別には選

古島敏雄氏の「中國農村慣行調査第一卷を讀みて」に答えて

んでいないため、従つてそのような、また當時のいわゆる匪區地帯と堺を接するような地域においては、事情をかなり異にするかも知れないけれども、すくなくともわれわれの調査地域においては、若干の例外があるとしても(たとえば良郷縣吳店村の如き貧村)、大體において、二重人格的な村落機構はなかつたように思われる。それは村長その他に、どんな偽裝的な村落機構をもつとも、縣政に對し、あるいは日本軍に對し、またいわゆる當時の匪賊に對しても、完全に効果を收め得るほどに、中國の政治は傳統的にあまくはないわけであり、またかりに誰が表面的に村長の役職にあらうとも、村内に聚居する同族の組織や、知識人、有力者、また富裕な家の居宅の外観など、容易に偽裝しつくせるものではないと思われる。そしてこのようなことがもしいい得るとすれば、村の支配階層が、ことさらに背後にかくれることの意味は大してないわけであり、従つて村内での大族とか富農とか、また比較的な意味では、そついで得るであらう名門とか有識者とかといわれる階層の間に、村長その他の役職が、たらいまわしにせられることが多く、従つてまた村の組織は、行政的には變化しても、「村の支配勢力の構成は根本的には變らなかつたように思われる」という氏のことばは、われわれの調査の範圍内では、やはり正しいということができるとはなからうか。

第二の「貧農層の姿が少しも明らかでない」という指摘は、われわれとしても素直にそれを認めざるを得ないが、すこしも

というのはやゝ酷に失しはしないであろうか。しかしわれわれが、主として村の上層部や支配的な階層を調査したのに對して、意識的に貧農層を對象とする調査をしていないことは事實である。しかし氏のいわれるところのものが、もし貧農層をもつて「動きの擔い手」と見ておられるとするならば、そしてその「動き」という意味が、村の、また慣行の變化を實際になつていくものとしての貧農層という意味であるとするならば、私に多少の異見がないわけではない。しかしとにかく、日本の貧農層と中國のそれとは、教育や意識の程度において、基本的な差異のあることを認めなければならず、われわれの調査経験では、殆んど調査の對象となし得ないものが多いといつてもよいと思う。このことは、さらに具體的な例證をあげて示すべきであるが、「中國農村慣行調査」に、時として、調査者のいう意味を理解し得ず、まつたくトンチンカンな農民の應答から、調査を抛棄している例などの存することによつても、その一端は想見し得るのではないかと思う。しかし貧農層の大半が、もしかくの如きであるとしたならば、村落構成の基本的な問題として、逆に却つて調査の必要度はさらに高められるわけであつて、それは必ずしも「あの條件下では無理」とまではいい得ないとしても、かなり困難であつたことは事實である。しかしとにかく貧農層の調査が、意識的に深くはどりあげられなかつたことは、その困難にもかかわらず、すくなくとも私として

は、いさぎよくカブトをぬぐよりほかにはない。

第三の規範意識の追求の仕方に、時として、直接意識をきく形になつてゐるが、これはできるだけ事實に現われた所を明らかにし、その動きの中で摺むべきであるといわれており、この點まつたく同感である。おもうにこれは氏が、第一卷の故早川保君の家長權の調査についていつていられるのではないかと思われる。もし然りとするならば、家長權といつたものの調査が、中國の家族構造においては、特に困難であることにももちろんよるが、同君が當時調査に不慣れであり、かつ法律を專攻とする人のひとつのわるい面を、この調査において露呈したものとすべきであるが。しかし同君の爾後の調査においては、この悪弊はかなり基本的に修正されており、また私をふくめて慣行調査全體としても、可能なかぎり具體的な事實に即して、その意識を問題とするようになってゐることは事實である。

第四に氏が指摘されてゐるところも、調査に對する態度や方法に關する基本的な問題であるといわなければならぬ。すなわちそれは、「調査項目にもられた豫想が外れたのではないかと思われる場合の、問題點の轉換、原因の理解のための條件の追求を如何に論議し、實行したかという點である」が、これについては私は次のようにお答えしたい。調査項目にもられた豫想なり假説なりに對する現實のあり方、換言すれば、われわれの事實に對する豫想の現實的、かつ一般的な妥當性や非妥當性



は、數回にわたる概況調査や、また特定村落のボーリング式調査によつて、すくなくとも概然的には把握しているのであつて、従つてこの問題は、調査に對する具體的技術的な問題として私は理解したいと思うのであるが、しかる場合、われわれはこの點を、十分に討議したとは必ずしもいい得ないと思われ。たゞ現實には各調査者が、それぞれに調査に弾力性をもたすべく腐心したことは事實であるが。そしてこの問題を古島氏が指摘されるに際して、ひとつの例としてあげられた東京側の調査項目は、われわれ現地側の調査項目の作制に際しては、大いに參照して學ぶところ多かつたことは事實であるが、調査に際しては、われわれの調査項目のみに準據したことを申添えておきたい。そしてこれは、氏が本書の書評の最初の方に、東京側と滿鐵側との調査項目について言及されていることに對しても、若干の回答になるのではないかと思う。

以上古島氏の懇篤な書評と問題の提示とに對して、回答というよりはむしろ辯解、まことに語るにおちたきらいはあるが、あの龐大資料を熟讀されての上の好意と示唆とにみちた氏の書評を、私はようやく昨今になつて讀む機會にめぐまれ、慣行調査の一員としてまことに感激にたえず、忽卒の間にかくは筆を驅つたわけである。しかし氏が指摘され、また問題とされたところのものは、慣行調査の基本的な問題であつて、それは當然他に答える適當な人があり、また調査者それぞれに異見も大いにあると

## 編集後記

ころとは思つけれども、氏の書評を再讀三讀して、去りやらぬ異常な感激のままに、ここにはあくまで私個人の私見として、古島氏の高評に答えようとするものである。(十二月二十三日誌す)

## 編集後記

學術雑誌は無風状態におかれていたのではなからうか。北側の寒いガランとした研究室の片隅にいて、ふとこんな疑問につき當つた。一般雑誌界では戦後十年色々の變化が見られた。戦前雑誌王國を誇つた講談社にもはや昔日の面影が見られないのは、しばらく措くとして、所謂綜合雑誌を見ても『世界』の登場と『改造』の崩壊は全く大きな出來事であつた。『改造』は前から大分清彩を缺いていたが、社長山本實彦の死を契機に編集部の手切りを強行しようとして、ストライキが起り、昨年始めより休刊を餘儀なくされた。われわれは進歩的雑誌の出版社の内部事情をあらためて知らされるとともに、今更の如き驚きを感じた次第であつた。今年より新出版社の下に復刊されると聞くが、果してどんな姿で登場するか。

だが『文藝春秋』の躍進こそほんとうに驚いていい事實である。躍進といつてもそれは賣行きが急激に増大したというにすぎないが、それでも何十萬部も賣れるというのは確かに注目すべきことである。これにはこの雑誌の編集方針が強く影響していると思われるが、われわれが一寸知りたいと思うこと或は物

知りらしく他人に聞かせたいと考えることが選り取り陳列されている。肩がこらないで、内容は解り易すぎる位にだけいて、おまけに上品である。戦後大學の數が増え、インテリが多くなるのと並行して、この雑誌の賣行きが急カーブを描いて増大して行つたのも、誠に當然な話であつた。第一、標題のつけ方がうまい。クサラリーマンの終着驛・停年々だとか、ク中年男の悲哀々或はク沈潜忍苦の十年々、更にはク娘をたづねて西半球へ々、ク敗將敢て兵を語る々という具合で、數え上げればきりが無い。讀んで見ると、何れも下らない——といえないまでも、大したことはないのであるが、退屈しているインテリにはあつらえ向きの讀物である。小説には中間小説というものがあるが、堂々たる論説や評論でもなければ、文藝作品でもない、いわば中間評論或は中間讀物といった類いのものであるが、忙しい反面退屈して人間には、全くもつてこいいのもので、一寸ワサビがきいていて、その上最新の記事ときているから、興味が起らざるをえない。

かくして『文藝春秋』はインテリの『キング』或は『講談俱樂部』ということに相成り、佐々木茂素社長をして、「本社はずます順調に進んでおります」とうそぶかしたものであるが、この雑誌の編集方針が他の雑誌に與えた影響もまた強いものがあつた。資本主義的自由競争の下ではこうなるのが當然であるが、老舗を誇る『中央公論』も「中公サロン」欄を設けたり、

ルポルターージュを増やしたり、論文をくだけた解り易いものにしたたりして、『文春』をまねないようにまねている。これも賣行きを一部でも増やすための努力の表現であるが、論文が解り易くなつたことはまあ結構なことであつた。『新潮』なども、『新潮雑壇』欄を設けて、隨筆的評論とシヤレ込んでいるのが目につく。

ところで最近、この新潮雑壇を讀んでいたとき、不思議な記事に出會つた。それは、關東の某私立大學では請負制が採られて、各學部長に一定金額でその年度の學部の經營を請負わせ、専任者に多くの時間を押しつけたり、講師の數を減らしたりして、安くあげるとは、各學部長の腕に委ねられているというのである。もし金が餘れば、部長は教授にこれを分配することになるが、こうなれば「株式會社何々大學」という看板をかかげてもそんなにおかしくもないであらう。この請負制がどの程度徹底化されているか、或はつい最近まで行われていたが現在ではなくなつているのか、その邊の消息は知らないが、ともかく私立大學では少くとも充分あり得る話である。われわれの身近かにおいても、或はこんなことがあるのかも知れないと思えば、他人事として笑つて過すわけには行かない。いやほんとに入學試験や夏期大學については、試験手當や講義手當を廻つて請負制的臭味が感ぜられるのではあるまいか。入學試験などを契機として飲み食いが盛んになるが、皆それがポケット・マネ

1から出ているならば、幸と思う。ともあれ、請負制によつて私學における教育と學問がいびつにせられることは確かな事實である。

話しは大分横道にそれたが、一般雑誌のこのような推移と變貌にも拘らず、法政に關する學術雑誌は相變らずの状態で、そこに著しい變化は認められない。これは學術雑誌が生存競争の法則の適用のない無風状態におかれていたためであるように思われる。勿論學術雑誌も浮沈があり、財政的事情で定期に出ないことも屢々ある。しかしそれは、その雑誌の賣行きや評判と全く關係のない外的な事情に主として基くもので、生存競争とは全く無關係である。大學や研究所の出す専門雑誌は殆んど最初から賣行きなどということを度外視している。學術雑誌が讀者を忘れるという奇妙な現象がここから生ずる。讀者を忘れた出版物などというものは、教育を忘れた學校と同様に、存在意義がない。このようなパラドックスがパラドックスとしてでなしに通用するということは、まさに悲劇である。大學において發行される専門雑誌は、特に大學の學生が重要な讀者として考えられるのであるが、このことがどの程度まで發行者乃至編集者に意識されているか。こういう意味において、學術雑誌には學界の最高水準を行く研究成果と並んで、從來の研究成果をもつと解り易い形で多くの學生に伝える、いわば啓蒙的論文も數多く載せられていいのではないか。かくして學術雑誌は學問の

宣傳又は弘報機關たる性格と共に教育機關たる性格をも持つことになる。

何れにしても、學術雑誌にも生存競争或は自由競争の原理がある程度導入されるべきではないか。學術雑誌はある意味では近代以前の段階にあるようにさえ思われる。二年近く雑誌編集に従事して、やつとこんなことに氣付いたとすれば、これはわたくしの手ヌカリであつたようだ。(服部)